

## ツシマヤマネコにおける人工授精の取り組み

○東野 晃典<sup>1)</sup>, 植田 美弥<sup>1)</sup>, 野村 美佳<sup>1)</sup>, 薄井 正<sup>1)</sup>, 市野瀬 碧<sup>2)</sup>, 柳川 洋二郎<sup>3)</sup>,  
楠田 哲士<sup>4)</sup>, 高橋 明帆<sup>4)</sup>

(<sup>1)</sup> よこはま動物園, (<sup>2)</sup> 横浜市繁殖センター, (<sup>3)</sup> 北海道大学 臨床獣医科学,  
<sup>4)</sup> 岐阜大学 動物繁殖)

ツシマヤマネコ (*Prionailurus bengalensis euptilurus*) は長崎県対馬にのみ生息する絶滅の恐れのあるネコ科動物である。環境省はツシマヤマネコの保護増殖計画を策定し、その一環として日本動物園水族館協会と協働して本種の生息域外保全に取り組んでいる。しかし、自然繁殖のみでは遺伝的多様性を考慮した飼育下繁殖計画の遂行が難しく、人工授精 (AI) 等の生殖補助技術の導入が求められていた。本研究の目的は、ペアリングのできないツシマヤマネコを腹腔鏡下卵管内人工授精 (LO-AI) により繁殖させることであった。雌のツシマヤマネコ (F1 : 7 歳, F2 : 6 歳) に馬絨毛性腺刺激ホルモンを 200IU 投与し、その 96 時間後に豚黄体形成ホルモン (pLH) を 1,000IU 投与して排卵を誘導した。LO-AI は pLH 投与 32 時間後に麻酔下にて実施した。2 頭の雄 (M1 : 11 歳, M2 : 2 歳) から採精して混ぜた運動性精子を、F1 と F2 の卵管内にそれぞれ  $2.4 \times 10^6$ ,  $3.3 \times 10^6$  注入した。腹腔鏡下における卵巣の観察では、F1, F2 ともに各卵巣に 3~5 個の卵胞の発育を認め、F2 には 1 個の出血体を認めた。LO-AI 実施の 20 日前から 80 日後までの卵巣活動をモニタリングするために糞中エストラジオール-17 $\beta$  濃度とプロジェステロン濃度を酵素免疫測定法で測定した。F1 では LO - AI 実施後に糞中プロジェステロン濃度の上昇が認められなかったが、F2 では有意に上昇し、出産まで高値を維持した。レントゲン撮影による妊娠診断を F1 は LO-AI 実施 45 日後に、F2 は 51 日後に行い、F2 に 1 頭の胎子を認めた。F2 は LO-AI 実施 67 日後に雌の子を自然分娩した。これはツシマヤマネコにおける AI の初成功例である。

